

都市計画事例研究

<新規研修>

いま日本の都市は、厳しい財政状況、少子高齢化、地球環境問題、地方分権など多様な課題を抱える中で、活力ある都市を再生するため、地域の特性を生かした個性豊かなまちづくりを展開し始めている。国でも、まちづくりの主役は市町村という視点に立って、市町村の自主性を尊重し、ソフト、ハードにこだわらず効果のある事業を柔軟に支援する「まちづくり交付金」を平成十六年に創設するなど、まちづくりに係る取り組みをバックアップしている。

新規研修「都市計画事例研究」は、そうした新たなまちづくりを進めている都市を訪問し、調査、意見交換、事

例研究を通して、まちづくりについての実務的な知識を修得することを目的としており、現地研修主体の研修となっている。なお、現地での研修に先立ち、東京工業大学准教授の土肥真人氏より最近のまちづくりの話題についての講話をいただくとともに、国土交通省の担当者から、都市計画制度の最近の動向、まちづくり交付金を活用したまちづくりについての講義を受けた。また現地研修には、これまで全国各地のまちづくりに参加している法政大学教授の高見公雄氏に講師としてご同行いただいた。

今回のセンター通信は、二泊三日で行った現地研修の模様を中心にレポートする。



修復作業が進むワイン醸造所の遺構「宮光園」

八月四日早朝、高見講師、受講者十一名を乗せたバスは中央高速を走り、最初の訪問地、山梨県甲州市の勝沼ぶどうとワインの里へと向かった。同地区に入ると、ぶどう園やワイナリーがそこかしこに点在し、正にぶどうとワインのまちを印象づけている。しかし近年、農産物やワイン市場のグローバル化が進む中で、産地を取り巻く状況は厳しさを増し、観光客も減少しているという。そこで市では、ぶどう狩りとワイナリー見学という従来型の観光形態に加え、近代産業遺産を観光の目

玉とする新たな活性化構想を立て、まちづくり交付金を活用して歴史と文化が息づくまちづくりを展開している。主な事業としては、明治期の鉄道遺産やワイン醸造所などの保存修復、点にする遺産群を結ぶフットパスルートの整備である。ソフト面でも、周辺農家と連携して縁側カフェを取り入れたフットパスツアーを開催するなど、住民と行政の協働がうまく機能してまちの魅力をPRしており、こうした点が評価されて第四回まち交大賞を受賞した。

新市のランドマークとして期待

甲斐市電王駅周辺整備

次に視察した甲斐市電王駅周辺整備

平成21年度 都市計画事例研究 時間割

月日	時間	教科目	講師
8月3日	9:00~9:30	受付	
	9:30~10:30	開講の挨拶、オリエンテーション	
	10:30~12:00	都市計画制度の最近の動向	国土交通省 都市・地域整備局 都市計画課 課長補佐 新屋 千樹
	13:00~15:00	特別講話	東京工業大学 准教授 土肥 真人
	15:10~16:40	まちづくり交付金を活用したまちづくり	国土交通省 都市・地域整備局 まちづくり推進課 都市総合事業推進室長 清水喜代志
	16:50~17:50	現地研修の事前説明	(財)全国建設研修センター研修局 研修第一事業部 調査役 木村 吉晴
17:50~	グループ討議		
4日 火	9:00~17:00	山梨県甲州市 勝沼地区 山梨県甲斐市 電王駅周辺 ※高崎市内宿泊	法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 教授 高見 公雄 甲州市 観光産業部 観光課 甲斐市 都市建設部 まちづくり推進課
5日 水	9:00~17:00	群馬県高崎市 高崎駅周辺整備 群馬県渋川市 中心市街地 ※渋川市内宿泊	法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 教授 高見 公雄 高崎市 都市整備部 建設部まちづくり課 他
6日 木	9:00~16:00	埼玉県本庄市 「本庄早稲田の杜」 埼玉県川島町 圏央道沿道地区田園都市産業ゾーン	法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 教授 高見 公雄 本庄市 拠点整備推進局 埼玉県 都市整備部 田園都市づくり課 川島町 都市整備課
16:00~	グループ討議		
7日 金	9:00~10:20	討議資料とりまとめ	(財)全国建設研修センター研修局 研修第一事業部 調査役 木村 吉晴
	10:30~15:00 (うち12:00~13:00は昼食)	現地研修報告・討議	法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 教授 高見 公雄 (財)全国建設研修センター研修局 研修第一事業部 調査役 木村 吉晴
	15:10~	閉講式	

事業は、平成十六年に三町（旧竜王町、旧敷島町、旧双葉町）の合併により誕生した甲斐市建設計画の重点プロジェクトに位置づけられている。①新市の玄関口にふさわしい交通結節点や道路交通網の強化、②安全・安心・快適に暮らせる充実した生活環境づくり、③魅力とにぎわいのある中心市街地の形成を整備目標とし、駅北口の開設、南北自由通路、南北駅前広場、アクセス道路網などをまちづくり交付金や交通結節点改善事業の補助制度を活用して整備している。すでに供用が開始された南北自由通路や橋上駅舎の設計は安藤忠雄氏が手がけ、その斬新なデザインは交通の結節点のみならず文化の結節点として、新市を引き立てるランド



安藤忠雄氏の設計による竜王駅

マークとしての期待感が高まっている。また、本施設の建設にあたっては、住民をはじめ駅利用者の意見を積極的に取り入れ、利便性や防犯対策、バリアフリーなどにさまざまな工夫がなされている。

民間活力を巧みに生かす

高崎市駅周辺整備

その日のうちに群馬県高崎市へと移動、翌五日はまず高崎市駅周辺整備を視察した。高崎市は「交流拠点都市たかさき」を目標に、その顔となる駅周辺では、昭和四六年の上越新幹線ルート発表から四〇年近く、土地区画整理事業や街路事業による基盤整備に加え、市街地再開発や駐車場などの機能整備が精力的に進められている。この間、



高崎駅の東口に整備されたペストリアンデッキ

交通の利便性等をアピールして企業誘致にも積極的で、昨年七月にはヤマダ電機本社が前橋市から移転、都市型大型店「LABI高崎」が駅東口にオープンした。これを機に高崎市では、ヤマダ電機の協力のもとペストリアンデッキや複合交通ターミナルをまちづくり交付金を活用して整備するなど、民間活力をまちづくりに巧みに生かす構想と仕組みづくり、そしてその実行力は大いに参考となったようだ。

市民参加の中心市街地活性化

渋川市四ツ角周辺地区

次の視察先である渋川市は、多くの地方都市がそうであるように、中心市街地の空洞化が深刻な課題となっている。市では、①まちづくりの理念・構想の構築、②まちづくりに携わる人材の育成、③まちづくり活動の拠点整備を再生の鍵として、ハード、ソフト両面から中心市街地の活性化に取り組んでいる。ハードでは、国の「ふるさと

の顔づくりモデル土地区画整理事業」を活用して、かつては商業、業務の中心であった四ツ角周辺地区の土地区画整理事業が進められており、都市計画道路六路線や区画道路網の整備、公園の設置により、円滑な交通の処理と災



四ツ角地区で土地区画整理事業の説明を受ける受講者

害の防止、さらには宅地の利用増進を図っている。一方ソフト面では、「まちづくり市民サポーター養成講座」の開講や高崎経済大学地域政策学部との連携などを通して、市民参加のまちづくりを促している。市民サポーター養成講座の受講生が手づくりで街を元気にするイベントを開催するなど、その成果は徐々に始めている。

県北の玄関口にふさわしい街並みへ

本庄早稲田駅周辺整備

この日は渋川市の施設「たちばなの郷・城山」に宿泊、翌六日は埼玉県本庄市へと移動して、独立行政法人都市再生機構が施行する本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業を視察した。この事業は、本庄新都心土地区画整理事業（約

一五四ヘクタール)のうち、上越新幹線・本庄早稲田駅周辺の約六五ヘクタールを先行整備するもの。駅前広場、幹線道路、公園等の公共施設整備とともに、早稲田リサーチパークと連携しながら、業務施設、広域的な行政文化施設の立地および良好な住宅地の形成を図り、「職・住・遊・学」の機能を備えた県北の玄関口にふさわしい街並みの創出を目指している。事業実施にあたっての工夫としては、①将来を見据えたエリアマネジメントの取り組み、②地域住民をはじめ多くの人々の意見を取り入れた計画とするためのワークショップの活用、③川や森など自然環境と調和した基盤整備、④早稲田ブランドを活用した積極的なPRなどがあげられる。



本庄早稲田駅北口に整備された駅前広場

圏央道開通のポテンシャルを活かして

川島インター産業団地

最後の視察先は、今年三月にオープンした「川島インター産業団地」。埼玉県内では、平成二四年度を開通目標に首都圏中央連絡自動車道(圏央道)が建設されており、開通すれば、企業立地のポテンシャルが飛躍的に高まることが期待されている。このポテンシャルを活かして、県では市町との共同事業で「田園都市産業ゾーンづくり」を圏央道沿道を中心に進め、その先導モデル地区の一つとして完成したのが川島インター産業団地である。この産業団地は、民間活力を導入したスピード感のある産業基盤づくりが特徴で、平成十九年十一月の造成工事以来、一年余りでまち開きとなった。また、整備にあたっては、周辺に広がる豊かな田園景観に配慮し、外縁部に屋敷林をイメージした高木植栽帯を配置しているのも特徴。産業団地への企業の立地意欲は高く、約四七ヘクタールの全区画に十八社が進出しているという。

都市計画行政の実情を体感する

有意義な機会

本研修では三日間で三県にまたがり



川島インター産業団地の一角

六か所の現場を視察した。各現場では、まちづくり担当者から一時間ほど事業説明を受け、質疑応答も活発に行われた。さまざまなアイデアや手法、苦労話などを生で聞いたことは、これからまちづくりを担う受講者の皆さんにとって非常に意義深いものであったと思う。一人の受講者は次のように感想を述べている。

「昨今の都市計画行政の実情を体感することが出来て有意義でした。主体の多様化、社会の成熟、経済情勢の悪化など、都市づくりの与条件はどんどん変化しますが、その対応にも各所で違いが出る事情を探るのが面白いものでした。また、その要因として、担当者等の人的要素が大きいことも衝撃的

です。有効な制度も人次第でその成果が左右される現実を見て、我が身のことを考えさせられます」。

また、この研修では最終日に「現地研修報告・討議」が用意されていた。受講者は三班に分かれ、「課題への対応としての事業実施に関する所見」「工夫されていた事項」「自ら実施するとした場合、留意する事項」「計画において変更が考えられる事項」「事業実施にあたって、活用することができると思われる補助制度等」「参考になった事項」などのポイントについて、現地研修を行った地区ごとに取りまとめ、発表した。そして発表された内容をもとに、高見講師から、各地区の取り組み内容について、問題点、工夫すべき点、評価すべき点などをご指摘いただき、まちづくりに関する実務的な知識をより深めた。

研修を振り返って印象に残っているのは、最終日の討議に向けて、情報整理やパワーポイントづくりを現地研修の宿舎でも夜遅くまで続けていた受講者の真剣な姿である。ハードな五日間だったと想像するが、議論を交わし、時には仕事の悩みを相談する中で、同じ分野で頑張る者同士のつながりを一層深いものにする機会ともなったようだ。